

子育て支援が支援者にもたらすもの

—一時預かり活動の支援者における変化の認知—

角張 慶子^{1*}、小池 由佳¹

本研究では、地域の子育て支援を支えている「支え手」(支援者)において、それらの活動に携わることで何がもたらされているのかを明らかにするために、質問紙調査を行い、KJ法によりその内容を分析した。その結果、本調査対象者の8割は活動によって自身に何らかの変化があったことを認めており、その変化の内容は【保育時の意識】【子ども・子育てへの興味関心】【現代の子育てへの理解】【自分の価値観・特徴・感情】【自分の子育て】のカテゴリに分類された。このように子育て支援活動に携わることは、他者に支援を与えるのみならず、支援者自身にも多岐にわたる変化を与えることが明らかになった。

キーワード： 子育て支援、支援者、KJ法

問題と目的

現代社会において、子どもや子育ておよび家族を取り巻く環境の様々な変化により子育てにおける多数の課題が生じている。そのような中で、子育て中の親が孤立感や不安感を強く感じることなく安心して子育てができるよう、地域における様々な子育て支援活動の充実が求められている。2015年には「子ども・子育て支援法」が施行され、我が国においてますます子育て支援の充実が図られることとなった。角張・小池(2013)では、子育て支援(「親子の居場所」)の利用により、親の不安感や孤独感の軽減・子ども理解の高まり等、子育てにおいてポジティブな変化をもたらすことが示されており¹⁾、子育て支援活動の効果も認められていると言えよう。

このような子育て支援の活動は、多様な地域資源によって支えられている。行政や専門職(支援職)による提供も当然のことながら、その活動の背景にはボランティアグループや有志団体という地域資源による「支え手」(以下、支援者とする)の存在がある。このような人々によ

る支援活動には、親子の居場所を提供したり、子育てに関する講座開催において子どもを一時「預かる」などの支援をしたりと、様々な活動が見受けられる。原田(2002)は「親を運転席に!支援職は助手席に!」というキャッチコピーを掲げ²⁾、親や市民が中心となり行政や専門職がそれを後方から支援するというスタイルの支援を推奨している。公的な支援だけで子育て支援を賄うのではなく、市民や当事者グループの「子育てネットワーク」等を公的機関や専門職が支えることにより、多くの子育て家庭を支援していくという方向である。このような多層的な支援の在り方は、昨今多様化・複雑化する家庭や子育て環境における問題に対応するにあたり、有効な方向性であると言えよう。とするならば、このように多層的に機能していくためにはこれらの支援者の存在は非常に重要であると言える。このような支援者による活動が継続的に発展していくためには、活動が利用者のみならずその支援者にとってどのような意味をもたらしているのか、明らかにする必要があると考えられる。なぜならば、ボランティアなどの援助行動によりもたらされる援助成果が活動継続の

¹⁾ 新潟県立大学人間生活学部子ども学科

* 責任著者 連絡先:kakubari@unii.ac.jp

利益相反:なし

動機づけとなる(妹尾,2003)³⁾との指摘があるように、その支援活動によってもたらされるものが支援者の活動継続の要因となる可能性が考えられるからである。

これまで、子育て支援の支援者に焦点を当てた研究には加藤(2010)⁴⁾がある。加藤においては、子育て経験をもち乳幼児一時預かり活動を行っている成人期中期の女性5名(49歳～59歳)に対し面接調査を行い、活動がもたらすもの及び子育て経験と活動との関係性を検討している。その結果、自らの子育てをとらえなおし、人生における現在と過去の立ち位置に気づくといった支援者としての発達が認められると論じられている。この結果は、支援活動が単に他者に支援を与えるということのみならず、それによって「与えられるものがある」という支援者にとっても意味があることを明らかにしたものである。同時に、それらの発達は、エリクソンの心理社会的発達理論において示された成人期の世代性の発達であると論じられている。また、このように成人期の発達の特徴をとらえる際には、就労以外の家庭外役割に目を向ける必要性が示唆されているものもある(西田,2000)⁵⁾。そこでは、昨今のライフスタイルの多様化により、成人女性において社会活動参加という家庭外での役割が就労とは異なった形で心理的 well-being に関連していることが明らかになっている。

このように、子育て支援の活動が支援者にとってどのようなものをもたらすかということとは、活動の継続性の要因を明らかにするという点と、成人期における個人の発達の様相の一端を明らかにするという点において、有用なことであると考えられる。現在、子育て支援の活動がより広い属性の支援者によってなされている現状を考えると、子育て経験者に限らずより広い属性(年代・性別・子育て経験の有無やその時期)の支援者においてもその変化(発達)が認められるものであるのかを明らかにする必要がある。したがって、本研究では、質問紙調査を用いることにより、より多くの一時預かり活動に携わる支援者を対象に広く検討を行う。具体的には、一時預かり活動に従事する支援者は、活動が自身に変化をもたらしていると認識

しているのかどうか、また、変化の認識がある場合どのような変化をもたらしていると認識しているのかについて探索的に検討することとする。そこで得られる知見によって、「支援活動に携わる」ことによる個人の発達の様相を検討するとともに、これらの重要な「地域資源」が存続するための要因検討の足掛かりとする。

方法

1. 調査協力者および調査手続き

A県内で活動する「保育グループ」に登録し活動している人(以下「支援者」とする)を対象に、所属のグループを通して質問紙を配布し郵送にて回収した。配布数は121名、回収数は85名(回収率70.2%)。調査実施時期は2011年10月。

なお、倫理的配慮として、調査にあたっては、「調査結果は統計的に処理され、個人が特定されることの無いようプライバシーに十分配慮し、個人に不利益が生じることは決して無い」旨を、質問紙表紙の依頼文に明記したうえで、任意で回答を求めた。また、本研究の実施に関しては、著者らが所属する機関の倫理委員会の審査を受け、承認を得た(2011.9.14承認)。

2. 調査内容および分析方法

本研究における調査および分析内容は、基本的属性の他、「一時預かり活動」に携わるようになってからの自分自身の変化の有無、および、その内容についての自由記述である。

自由記述は、KJ法(川喜田,1967)⁶⁾に準じて分析を行った。KJ法の分類作業は著者の2名により行われた。

結果

1. 基本的属性

回答のあった協力者85名の基本的属性はTable1のとおりである。

2. 活動による変化の認識

活動に携わることによって、自分自身に変化したか否かの問いに対する回答はFigure1のとおりである。支援者の8割は活動に携わることによって何らかの変化を認識していることが明

Table1 調査協力者 基本属性 N=85

		人数(%)
年代	30歳代	8 (9.4)
	40歳代	26(30.6)
	50歳代	21(24.7)
	60歳代	26(30.6)
	70歳代	4 (4.7)
性別	女性	83(97.6)
	男性	2 (2.4)
子育て経験	あり	83(97.6)
	なし	1 (1.2)
免許・資格	なし	56(65.9)
	あり	29(34.1)
(内訳) *複数保有有	幼稚園教諭	11(12.9)
	保育士 (内:幼・保両方)	16(18.8) (10(11.8))
	小学校教諭	1 (1.2)
	看護師	4 (4.7)
	その他	12(14.1)
活動年数	1年	12(14.1)
	1年超～5年未満	25(29.4)
	5年以上～10年未満	14(16.5)
	10年以上～15年未満	17(20.0)
	15年以上～20年未満	11(12.9)
	20年以上～	5 (5.9)

らかになった。この変化の割合は、年代や活動に携わる年数によって差がみられるのか否かを検討するため、 χ^2 検定を行った結果、いずれも有意差は認められなかった。

3. 活動による変化の認知の分類

活動に携わることによって「変化があった」と回答した68名の自由記述の具体的内容を分析の対象とし、計90個の自由記述(具体的内容)を得た。これらの自由記述をKJ法に準じ分類したところ、19個の小カテゴリが抽出された。続いて、これらの小カテゴリをまとめ、5つの上位カテゴリが構成された(Table2)。以下に5つのカテゴリについて記す。【】内は上位カテゴリの名称、《》は小カテゴリの名称、「」は具体的記述内容である。

【保育時の意識】

このカテゴリには、「子どもから学び又、自分の保育時の考え方、今と、自分の時代の考え方の差等、その時々を感じ取って、その子にとって一番よい保育をと心掛けようとしている。」などといった《保育内容・心がけ》の変化および、「保育するんだと構えてやるのではなくその時間を子どもと楽しく過ごすようになってきた。」というような《保育時の感情》の2つの変化が含まれている。

【子ども・子育てへの興味関心】

このカテゴリには、「街の中でも小さい子が目につく。本当に可愛く思う。」というような《子どもへの興味関心》が増したこと、「親や子どもに声をかけることが多くなった。特に、親には、一声かけるようにしている。」といった《子育てへの興味関心》の増加やそれに基づいた声をかけるなどの行動の変化、また「小さい子の興味のあるテレビ番組、絵本、歌など気にかけるようになった。」というように《子ども・子育て関連事象への興味関心》の増加、等が含まれ、支援に関わることにより、より子どもや子育てに対して興味を深めている様子がうかがえる。また「子どもが前より好きになった。」などの《子どもへの感情》の変化、「保育にかかわり子どもの持っている可能性、すばらしさにあらためて気づくことができた。」といった《子ども観》の変化なども認められた。

【現代の子育てへの理解】

支援に関わることにより、変化しつつある子育ての在り方や子育て中の親の意識について深く考えるようになったり気にかけたり、またそのような現代の親への共感を深めているのがこのカテゴリである。「自分の子育てとは異なる

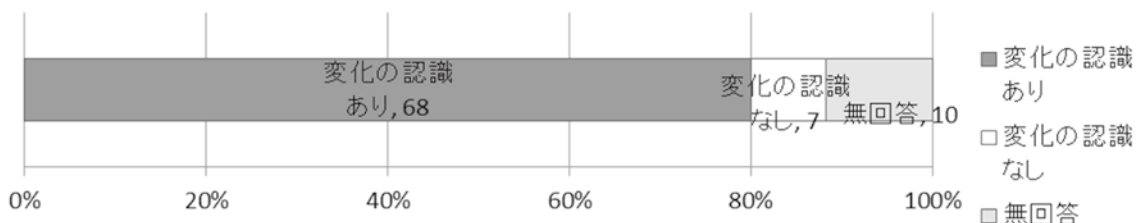


Figure1 支援に関わることによる変化の認知の有無

Table2 支援に関わることによる自身の変化の認識 (分類)

上位カテゴリ	小カテゴリ	数	回答例
保育時の意識	保育内容・心がけ	6	子どもたちの気持ちにもっと応えられるようになりたいと考えようになった
	保育時の感情	2	構えずにその時間を子どもと楽しく過ごすようになってきた
子ども・子育てへの興味関心	子どもへの興味関心	6	街の中でも小さい子が目につく／子どもに声をかけるようになった
	子育てへの興味関心	3	小さなお子さんを連れいているお母さんに自然と目が行く
	子ども・子育て関連事象への興味関心	5	新聞やTV等で子どもの記事や番組を見るようになった
	子どもへの感情	3	子どもが前より好きになった
	子ども観	3	子ども持っている可能性・すばらしさに改めて気づいた
現代の子育てへの理解	子育て観・子育て環境への認識	5	自分の子育て時の意識と今のお母さんの意識の違いを感じる
	子育て・親への共感	4	新米お母さんに寄り添っていくことが大切と改めて感じた
自分の価値観・特徴・感情	物事の見方・考え方・価値観	10	大きな心で物事を捉えられるようになった
	自身の特徴	8	前向き・行動的になった
	成長・学び	2	いろいろな人との出会いで自分が成長できた
	個としての自信・自覚	5	自分自身にも自信が持てるようになった
	生きがい・喜びの感情	9	保育の後は「笑顔」が増える／生きがいのある人生は楽しい
	キャリアアップ	4	活動の幅が広がった／保育士の資格を取った
自分の子育て	自分の子どもへの見方	3	自分の子どもを良く見れるようになった
	自分の子どもへの接し方・態度	6	自分の子どもに優しく接することができるようになった
	自分の子育てへの反映	2	より良い子育てを心がけるようになった
	自分の子育ての振り返り	4	自分の子育ては子どもたちに申し訳なかったと思ひ手紙を書いた

事! 考え! など、色々な事があり、どう対処するか気になる事が多くなった。」「私の子育て時の意識と今のお母さんの意識の違いをはっきり感じる。」などという《子育て観・子育て環境への認識》、「自分の子どものときは子どもしか見えなかった。今では母親の気持ちがよく分かる。」「年を重ねた自分の考えも持ちつつ、新米お母さんに寄り添っていくことが大切だと改めて感じる事ができた。」という《子育て・親への共感》の2つの下位カテゴリが含まれている。

【自分の価値観・特徴・感情】

このカテゴリには、支援活動に携わることを通して、個人としての自分自身について変化を認めている内容が含まれた。

「物事を広い気持ちで見えるようになった。」「世の中を余裕をもって見れるようになった。」などといったように《物事の見方・考え方・価値観》が変化したり、「前向き、行動的になった。」「元気に優しくなれた。」といったように支援に携わることによって《自身の特徴》に変化を認めている。また、「いろいろな人たちとの出会いで自分が成長できたと思う」というように自分自身の《成長・学び》に気がついたり、「少しでも人の役に立てると思ひ自分自身にも自信がもてるようになった。」「単なる主婦でなく社

会に貢献している社会人としての自覚と自負が芽生えた」というように、主婦や母親としての自分以外の自分に対する自信や自覚が生まれたり《個としての自信・自覚》、「子の成長を見ることは『生きがい』。生きがいのある人生は楽しい。」といったように活動を通して《生きがい・喜びの感情》を得ているという回答もあった。また、「保育活動を始めて20年。5年前保育士資格を取った。」「今後保育活動を主に働きたいと思ひ始めている。できれば資格も取得したい。」と表現されているように、この支援活動を通してさらなる《キャリアアップ》を果たしたり目指したりしている人もいることが明らかになった。

【自分の子育て】

このカテゴリに含まれるのは、子育て支援をすることで、他者の子育てを支援するのみならず自分の子育てにおける変化があるというものである。保育活動をする中で、「自分の子どもを良く見れるようになった。」「自分の子どもにも物事が客観的に見えるようになった。」というように《自分の子どもへの見方》が変化したり、見方だけでなく《自分の子どもへの接し方・態度》も変化していることがわかる（「保育をした日は、自分の子どもたちに、いつもより優しく接してあげられるような気がする。」）

「我が子にも心の余裕をもって接してあげようと思った。）。また、「いろいろな子ども達と出会い、自分の子育てに役立つようになった。」「我が子を見つめなおしより良い子育てを心がけるようになった。」というように《自分の子育てへの反映》もみられる。また、他人の子どもや子育てと接することにより「自分の子育ては!?!と改めて考えることしばしば。自分の子どもとの接し方もずいぶん反省したり、改善しなければ・・・とは思っている。」「ママや子どもたちを見ていて私の子育ては子どもたちに申し訳なかったと思い、子どもたちに手紙を書き、離れて暮らす子どもから返事をもらい涙が出た。」などと《自分の子育ての振り返り》をする様子も見られる。

考察

本研究では、子育て支援（一時預かり活動）に携わる支援者は、活動が自身に変化をもたらしていると認識しているのかどうか、また、変化の認識がある場合どのような変化をもたらしていると認識しているのかについて明らかにすることが目的であった。調査の結果、子育て支援活動の意義は、「他者に支援を与える」こと、およびそれにより「支援の受け手」に変化があることのみならず、「支援の担い手」にも変化をもたらし得るものであることが示唆された。

また、その変化の認識の内容は、多岐にわたる。支援活動が続ける中でその活動における心がけが変わりゆく点は、保育という社会活動を行う者としてのまさに「『支援者そのもの』としての育ち」である。また、子どもや子育てまたは現代における子育て観などへの興味は、広がりかつ深化している。単に、活動中の目の前の子どももしくは親子のみに視線が注がれるだけではなく、活動外においてもその興味関心は広がり、また地域の子育て家庭に注がれているのである。このことは「地域で子育て」という環境作りにおいて重要な役割を果たすと考えられる。さらに、活動を通して自分自身の価値観や行動が変化し、キャリアアップにつながるなど、「活動を通した『個』の育ち」も明らかになった。同時に、他者の子育ての支援をすることは、自らの子育てにも気づきを与え影響を与えるこ

とが認められた。自分の子育てへの反映、振り返りによる「『親』としての育ち」であるといえよう。菊池（2008）はキャリア発達を職業発達のみならず生涯発達そのものにとらえ「キャリア成達は、過去・現在・未来の時間軸の中で、社会との相互関係を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく力の形成の過程である。」であると述べている⁷⁾。子育て支援の活動は、一方的に「支援を与える」方向の活動ではなく、その支援の受け手との相互作用の中で関係を保ちつつ、また、過去の自らの経験を基に、現在の活動を通して、その中で未来へ向けて自分自身や自らの子育てを変化させていくという時間軸の中で営まれていることを考えると、これらの支援者における変化は「キャリア発達」すなわち「支援者」「個（自分）」「親」としての成人における発達の一側面であると考えられる。

今回の調査協力者の約4割が10年以上という長期にわたり活動を続けていることなどを考えると、このような個人の発達の一側面であると考えられる様々な変化が支援者にもたらされることによって、これらの地域における子育て支援活動は支えられている可能性が推察される。とするならば、このような重要な地域資源が存続するためには、前述の原田（2002）の指摘の通り、その活動をさらに専門職（支援職）が活動のコーディネートやコンサルテーション等を通して適切に支える仕組みを維持することによって、この支え手の発達を担保する必要があると考えられる。そのことが、個人の活動の継続要因となりひいては活動が安定的に継続することにつながると推測できるからである。

最後に本研究および今後の課題について述べる。上述のとおり、支援活動が支援の受け手のみならず支援者の変化につながることを示唆されたが、本調査における対象の「子育て支援活動」は「一時預かり」に限定されたものである。様々な子育て支援活動を支える地域資源の継続性を検討するために、より様々な活動に従事する人について検討する必要がある。さらに、今回結果的に回答者の多くが子育て経験者であったということから当初の目的であったより広い属性についての検討がなされたとは言い難い。

また、本研究において明らかにされなかった「活動期間」による変化の質的差異についても、支援者における成人期の「発達」の様相をより明らかにする意味で詳細に検討を重ねる必要がある。今後、サンプルサイズを増やし縦断的に変化を追うことで量的・質的ともに検討を重ねることでより多角的な発達の様相を明らかにすることができるであろう。

付記

本研究は平成 23 年度新潟県立大学教育研究活動推進事業課題解決型研究プロジェクト推進事業（代表：小池由佳）によるものである。

なお、本研究を行うにあたり、A 県内で活動する保育グループの皆様および A 県女性財団の皆様にご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

文献

1) 角張慶子、小池由佳。「子育て支援」が親に与える影響について - 「親子の居場所」の利

用による子育てにおける変化 - . 人間生活学研究 2013;4:41-50.

2) 原田正文. 子育て支援と NPO. 大阪: 朱鷺書房、2002.

3) 妹尾香織、高木修. 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究 2003; 18 (2) : 106-118.

4) 加藤道代. 子育て経験をもつ成人女性による一時預かり活動 - 支援することによる発達 -. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2010;58 (2) :153-168.

5) 西田祐紀子. 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. 教育心理学研究 2000;48:433-443.

6) 川喜田二郎. 発想法. 東京: 中央公論新社、1967.

7) 菊池武剋. キャリア教育とはなにか. 日本キャリア教育学会 編、キャリア教育概説. 東京: 東洋館出版社、2008;14-15.

ABSTRACT

What childcare support gives back to support-givers - Recognizing changes in those who support temporary childcare activities -

Keiko Kakubari^{1*}, Yuka Koike¹

¹ Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

* Correspondence, kakubari@unii.ac.jp

In this study, regarding the supporters who assist in regional childcare support, in order to clarify whether being involved with these activities does something for the supporters, we carried out a questionnaire survey and analyzed the responses using the KJ method. 80% of those surveyed recognized that there had been some changes in themselves due to their activities, and these changes were divided into the categories, “awareness while taking care of children”, “interest in children and childcare”, “understanding of modern child-rearing”, “one's own values, character, and emotions”, “one's own child-rearing”. It was revealed that being involved in childcare support activities in this way not only provides support for others, but also changes the support-giver in various ways.

Key Words: child care support, the supporters, KJ method analysis